

教養教育を考える

新井保幸

教育学系教授

不人気な教養教育

ここで教養教育というのは、大学の教養課程の学生を対象としておこなわれる教育を指す。教養教育の対概念は専門教育である。教養の定義はむずかしいが、人文学の古典に関する知識に限定せず、社会科学や自然科学の基礎的知識なども含めて考えている。

第2次大戦後のわが国における教養教育ないし一般教育(general education)の歴史を振り返ってみると、決して幸運なものではなかった。戦後教育改革の一環としてアメリカから導入された一般教育の理念はわが国の土壤に根付かなかつた。私が大学に入学したのは今から30年以上も昔の1968(昭和43)年であるが、当時は人文、社会、自然の3分野からそれぞれ12単位、合計36単位を修得しなければならなかった。1科目が通年で4単位の場合、3分野から3科目ずつ履修することになる。中には充実した講義も

あったが、概して教養科目の人気は振るわなかつた。非常勤講師がその科目を担当するケースが多かつたが、そのことは専任教員が担当したがらなかつたということを意味する。教員には教養科目を専門科目よりも一段低いものとして軽視する風潮があつた。教員がそういうふうだったから、学生もまじめに受けようとはしなかつた。専門科目は一生懸命勉強するが、教養科目は単位さえ取ればいいという雰囲気が蔓延した。教養科目はだんだん無意味で無用のものと見られるようになり、「パンキヨー」という蔑称がいつの頃からか広まつた。

専門教育へのシフト

大学設置基準の「大綱化」(1991年)によつて、各大学は独自に工夫して教養教育をおこなうことができるようになったが、たいていの大学が実際にやつたのは教養科目を廃止ないし削減してそれを専

門科目に置き換えることであった。人気のない教養科目はなくす方向で検討するという、わかりやすいけれども安易な対応に、目立った反対は起らなかつた。わが国の大学におけるこのような教養教育軽視の傾向は、アメリカの大学（学部段階）における教養教育重視の傾向と著しい対照をなしている。

さすがにわが国でも教養教育を何とかしなければいけないという危機感から、最近は教養教育をめぐる論議が出始めている。とは言え、「大綱化」以前の状態に戻すだけでは、不人気に変わりはないだろう。根本問題は何一つ解決されていないからである。根本問題とは、知的好奇心を刺激しない教養教育の低調な実態であり、それと密接に関連する教養教育軽視の風潮である。そこにメスを入れなければ、またぞろ教養教育への怨嗟の声が飛び交うだけだろう。

楽観的な予定調和説

今までのような教養教育ならいくらやっても無意味で、いきなり専門教育から始めればいい、と主張する者もいる。「まず専門、しかるのちに教養」という順序がいいのだ、という。喻えで説明すればこうなる。深い穴を掘ろうとすれば、穴の大きさはおのずと広がってい

く。だから、大きな穴を掘ろうとする必要はない。ただ深い穴を掘ることだけを考えていればいい。深い穴を掘るというのは、それぞれの専門を深めることを意味している。何の専門ももたないで、ただ幅広い教養といってみたところで仕方がないというわけだ。たしかにそういう議論にも一理ある。そういう仕方でしか教養は身に付かないと言われれば、そうなのかもしれない。この予定調和説は長期的なスパンで言えば間違っていないが、しかし大学の数年間でそれが達成されると思うなら楽観的にすぎよう。結局はそういう仕方でしか教養は身に付かないものだとしても、これは各人の努力に問題の解決を委ねてしまっている。意欲的で熱心な学生はそれでもいいかもしれないが、放っておけばろくに勉強しないまま卒業してしまう学生の方が圧倒的に多いだろう。私たちは教養教育についての展望を何ら示し得ないまま、ただ懸案先送りをしてきただけではないのか。

教養教育を軽視してきたツケは、海外で生活する日本人のパーティ恐怖症というかたちで現れている。欧米の社会ではよくパーティが開かれるが、それに出るのをいやがる日本人が少なくないという。なぜいやがるのかというと、話の輪の中に加わっていけないからである。み

んなで話が盛り上がっているのに、自分一人蚊帳の外というのは何ともつらい。日本人とは仕事の話はできても、趣味や文芸の話はできず、会っていて退屈だというイメージはかなり定着している。

専門と教養の両立

しかし、教養教育の問題を棚上げにし続けていれば、大学は専門学校と何らちがいがなくなってしまう。

現代はこれまでのような「追いつき、追い越せ」の時代ではない。既成の知識を覚えるだけでは済まない。みずから考える力、独創性の育成が必要だという話は、耳にタコができるほど聞かされている。そのこと自体を否定する理由は何もないし、またそのつもりもない。しかし、専門性重視のかけ声によって、ともすれば教養教育は二の次、三の次のこととされてしまっている。高度の専門性と豊かな教養とは本来、二者択一の問題ではない。現にアメリカの大学では、学部段階は教養教育に徹し、専門の勉強は大学院からという方針を守り続けており、それが有効に機能している。

良質の教養教育の条件

私の楽しみの一つは、D. アッテンボローが案内役を務める BBC 制作の動物

番組を観ることだ。最近も「鳥の世界」というシリーズが放映されていた。これがなかなかおもしろい。第1に、むづかしくない。内容を理解するのに何の予備知識も要らない。第2に、これまで知らなかつたことやびっくりするようなことが次々に出てくるので退屈しない。そして第3に、生きていく（食べ、敵から身を護り、子孫を残していく）ために、鳥たちが自分の特性に合わせてさまざまの工夫をしていることがわかり、考えさせられることが多い。さながら「鳥類学入門」といった観なのだが、これなど教養教育の見本ではないだろうか。毎回楽しんでみているうちに鳥の世界について体系的な知識が一通り学べる仕掛けになっている。しかも映像に訴えるから、効果はてきめんである。わかりやすく、見て（聞いて）おもしろく、ためになる（考えさせられる）。このあたりに教養教育の要諦があるようと思われる。

教養教育についての提言

良質の教養教育は退屈どころか、知的刺激に満ちあふれたもののはずである。大学の教員がそのような講義を提供しようと努めなければならないのは言うまでもない。かつて東京教育大学では、一般教育の教育学や教職科目的教育原理を名

だたる教授たちが率先して担当した。しかし各大学で努力するだけでは限界もある。穿った見方をすると、大学が教養教育から撤退したのは、学生を満足させられるカリキュラムを自前で供給するだけのスタッフが十分でないことを薄々感じているからではないか。担当教員がみんな一流というわけにはいかない。これだけメディアが発達した時代だ。はっきり言って、大学の精彩を欠いた教養教育など太刀打ちできない、知的刺激に富んだものはいくらでもある。そうだとしたら、学生が通常の講義以外に自発的に読書したり、講演を聴いたり、展覧会や演奏会に出かけて学習したことを、教養教育を受けたと見なしてもよいのではないか。

フランスにはコレージュ・ド・フランスという有名な研究教育機関があるが、そこでは鋭々たる碩学たちがおこなう講義を一般市民が自由に聴講できることになっている。必ずしも各大学が独自に用意するプログラムだけを教養教育と考える必要はない。わが国で言えば放送大学の講義や教育テレビの市民大学講座を視聴するのも立派な教養教育である。学生がこういった講義を自発的に聴き、学習成果をレポートとして提出した場合、一定の条件付きで単位を与えることも検討されてよいだろう。そうすれば教養教育は今よりずっと魅力あるものになるのではないだろうか。

(あらいやすゆき 教育学専攻)

